

石川県白山自然保護センター普及誌

はくさん

第24巻 第1号



白峰村河内谷大空 ^{あたご} 旧愛宕八郎家

母村を離れ山中に居住する出作りは、特異な生活形態であるが、白山麓山間部では古くから行われてきた普通の生活形態であった。白山山中には、今もその出作り小屋が残る。1988年まで、季節出作りで使用されていた白峰村河内谷大空、日当たりの良い南向き緩斜面上に残る愛宕八郎さんの小屋は、ほぼ完全にその姿をとどめている。母屋（住居、養蚕用）以外に、納屋（農作業場、農機具置き場）、倉（食糧保存、物置）をもち、出作りでは珍しく近くで水田耕作も行っていた。

母屋の造りはしっかりしている。豪雪に耐えうるように部分的には半間ごとに柱が施され、屋根は寄棟形式の合掌造り、壁には厚い赤土壁が施されている。1934年の水害後に場所を移転はしたが、100年はくだらない歴史を持つという。また、茅葺きの屋根は1万束以上の茅が葺かれており、葺き替えをして40年以上もたつが、今でも雨漏りもしないという（1996年5月17日撮影、小川 弘司）。

白山室堂平の高山植物

—23ヵ年の継続観察結果より—

菅沼 孝之*・辰巳 博史**



写真Ⅰ 白山山頂（最高所）の直下に広がる室堂平
番号はそれぞれの調査地

白山室堂平での23ヵ年の継続観察

白山の最高峰である御前峰は、標高が2702.2mあり、頂上付近は樹木限界を超え、コメススキやイワギキョウなどわずかな草本しか生えていません。頂上より下方200mあたりからナナカマド類やハクサンシャクナゲが点在した見事なハイマツ群落が広がっています。その間の平坦地や緩傾斜地には雪田植物群落が展開し、短い夏ですが、すばらしい高山植物の自然の花模様が観察できます。

白山の西には白山より高い山がありませんし、多くの研究者の研究対象となったこともあって、ハクサンコザクラ、ハクサンイチゲ、ハクサンフウロ、ハクサンシャクナゲなど「ハクサン」の名がつく植物が数多くあります。

御前峰の下方300mに開けたゆるやかな斜面と平地を室堂平といい、そこに室堂センター、宿舎、白山比咩神社の社務所があって白山登山の拠点となっています。かつてはキャンプもできましたが、1962（昭和37）年に国立公園に指定されると同時に高山植物等の保護のために、ここでのキャンプは禁止されました。

どのような目的であれ白山に登って、一面の高山のお花畑を見て感嘆しない人はいません。けれども、その景観に慣れてくるとお花畑は自分のためにあるように錯覚して、どっかと腰を下ろしたり、ずかずかと歩き回ったりします。ひどい人になると、お花畑の上にテントを張って一夜の宿にってしまうことさえあります。

今から20数年前までは、自然保護を叫ぶのは一部の者に限られていました。ですから、室堂平のお花畑は心ない人たちによってかなり荒らされた状態でした。この状態を改善するために、お花畑の中に入らないように柵とロープで人の歩くところを指定するようになりました。この措置によってお花畑は人の踏み付けから守られ、少しずつ元の状態に戻りつつあるのは喜ばしいことです。

わたしたちはこの回復状況を追究するために1973年から室堂平のお花畑の調査を毎年1回行い、1995年で23年目になりました。この23年の間にはほぼ同じ時期に調査をしてきましたが、雪が多い年や少ない年によって、お花畑の植物の生育のようすは少しずつ違いました。この23カ年の積み重ねは貴重な資料であると自賛しています。

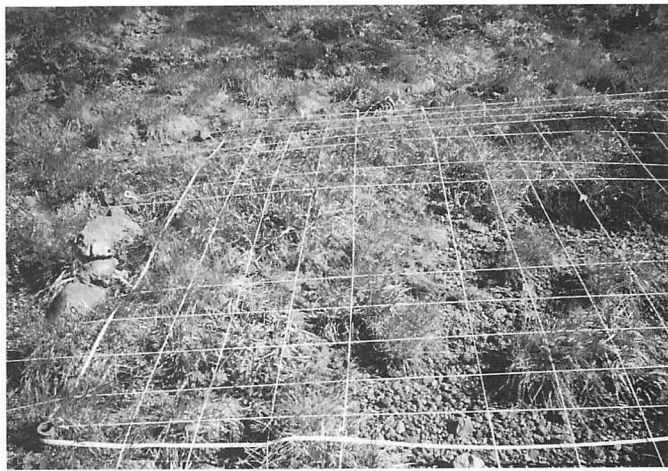
旧資材置き場で回復状況を追究する

さて、調査はお花畑の荒れ方のひどい場所に2～3m四方の調査区3カ所を設け、その中に20cm四方のメッシュを作って、生えている植物を種類毎にその広がりや消長を調べ、図1、図2のような投影図を作成しました。区内には靴を脱いで入り、また周辺の植生の保護に心がけました。3カ所の調査区のうち、2カ所の植生の変化を紹介しましょう。

調査区Ⅰは、宿泊施設建設時に資材置き場となった裸地です（写真1）。礫混じりの砂地で、融雪水や雨水でしばしば砂が流れる場所です。



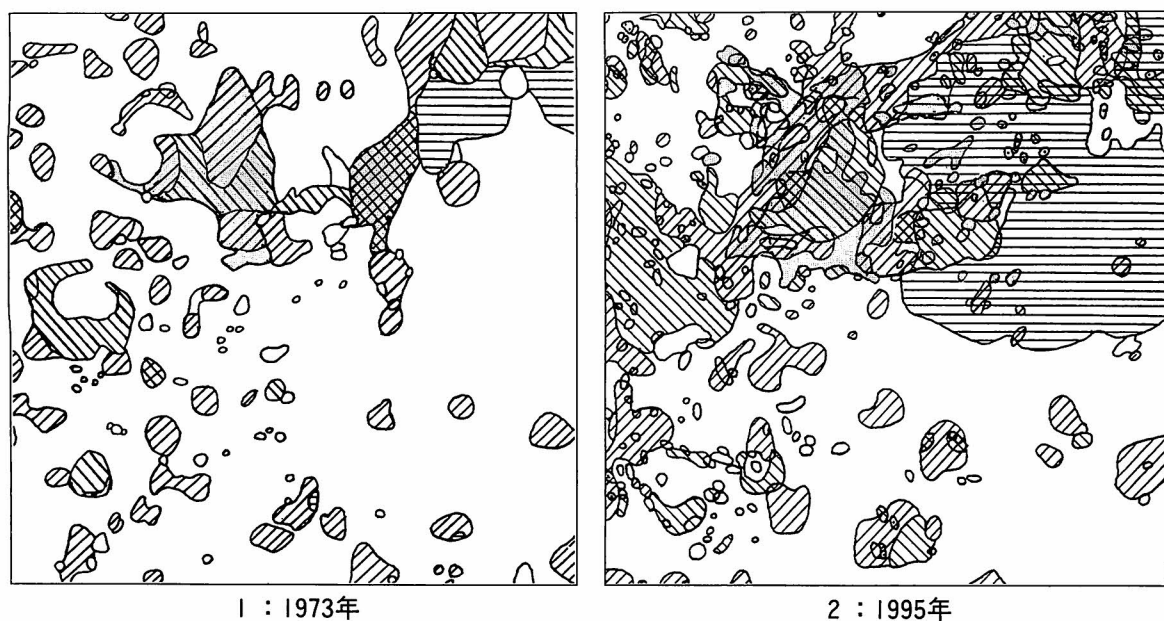
1975年



1995年

写真2 調査区Ⅰ

裸地はこの20年間あまり回復していない



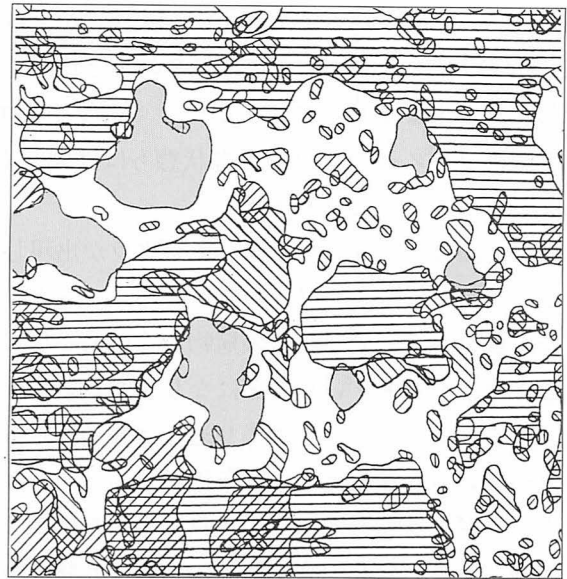
この調査区Ⅰ（図１）では、石川県の郷土の花「クロユリ」の占有面積の割合は1973年から大きい増減はなく、6～8％台で推移しています。全体的には他の植物に比べて生育状態はそれほど優勢ではありません。クロユリは毎年同じ場所に生育地を確保していて、その生育面積はあまり変わりません。

図1の2では、クロユリは図の上辺に群落をつくっています。下辺にはほとんどみられません。クロユリの周りにはヒロハノコメススキ（イネ科）、ショウジョウスゲ（カヤツリグサ科）、ガンコウラン（ガンコウラン科）などが密生していて、クロユリはそれらと競合するように生育しています。競合というよりは互いに支えあって生育しているといった方がよいのかもしれませんが。図1の上辺に比べて下辺の植生密度は低く、ヒロハノコメススキやショウジョウスゲが散在していて、そこではクロユリはわずかししか生えていません。また、マイヅルソウ（ユリ科）、ミヤマヌカボシソウ（イグサ科）、ミヤマウイキョウ（セリ科）などもクロユリと同じように周辺に生育していますが、これらの植物は何年たってもそれほど増えることもなく細々と生きています。

土地が荒らされて植物が生えなくなると、そこは雪解け水の流路となり、一度そのようになると何年も同じ状態が続きます。そういう土地には先駆種としてヒロハノコメススキなどのイネ科植物が最初に生えてきます。調査区Ⅰではヒロハノコメススキの芽がでた数は毎年500～1,000程度みられます。このようにヒロハノコメススキの芽生えは毎年多数みられますが、一冬で消滅してしまってなかなか定着できません。ですから、一度土地が荒らされると植生の回復がむずかしく、いつまでも植物の生えない状態が続きます。そういう土地がいまだにあちこちに残っていて、植物の育たない空白地帯となっています。

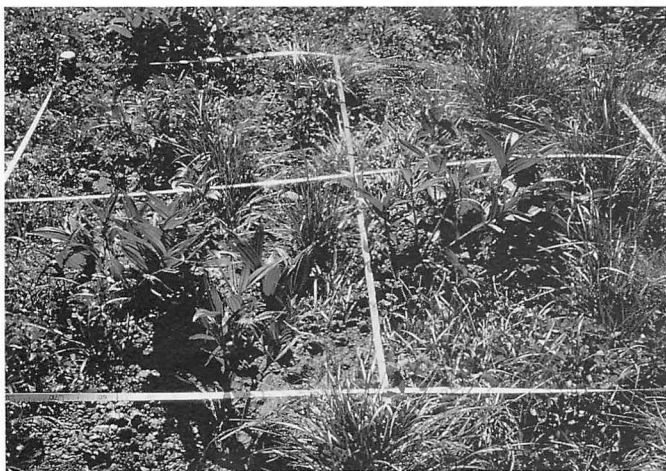


1 : 1973年

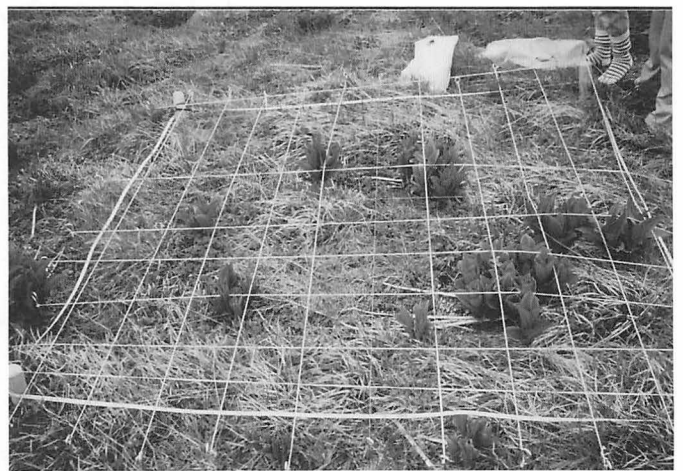


2 : 1995年

図2 調査区IIの高山植物の占有図



1975年



1995年

写真3 調査区II

1975年に目立った裸地は1995年にかなり回復している

流れのふちの調査区で回復状況を追う

調査区IIは、溝が掘れてそこへ集中した水流があふれて出来た裸地と考えられます(写真1)。融雪時には大量の流水が溝からあふれるところで、腐植になりきれない植物遺体を上層に伴います。

この調査区IIでは、クロユリは図2の凡例として出ていませんが、わずかな株といくつか芽がでているのみで、生育状態はよくありません。ここでは先駆種のヒロハノコメスキやショウジョウスゲが大部分を占め、その間にミヤマキンバイ(バラ科)やコバイケイソウ(ユリ科)が生育しています。クロユリは大形の植物に隠れるように育っているなので、かき分けて見る必要があります。

図2の2ではコバイケイソウの株は体が大きいのので生育地を占める割合は大きくなっています。コバイケイソウの占有面積は図2の1と比べて増加していますが、この20数年来10～20%の間で推移し、変化はほとんどありません。株数も4m²中、6～8株の間でほとんど増減がありません。周辺のコバイケイソウの生育状態もほぼ同じように散在していますが、大型であるため一面に広がっているように見えます。

この調査区では、アオノツガザクラが出現していますが(図2の1)、10年ほどで消滅してしまいました。コバイケイソウのほかにハクサンボウフウ(セリ科)、ミヤマキンボウゲ(キンボウゲ科)などが見られますが、他の植物の陰にあって大きく育つことがなく次の年には消滅して、また新たな芽生えをみるということになります。いずれも成長して花を咲かせ、結実することはなかなかむずかしいようです。この繰り返しは普通にみられることで、高山帯ではたまたま日当たりが良く温度が高い日が続くような好条件がそろったときに開花、成熟の機会が訪れます。しかし、これさえもごく稀なことです。この現象は白山だけではなく、高山帯では普通のことで、生育地の自然条件の厳しさに対して、高山植物のしんぼう強さがうかがえてほほえましくさえ感じます。

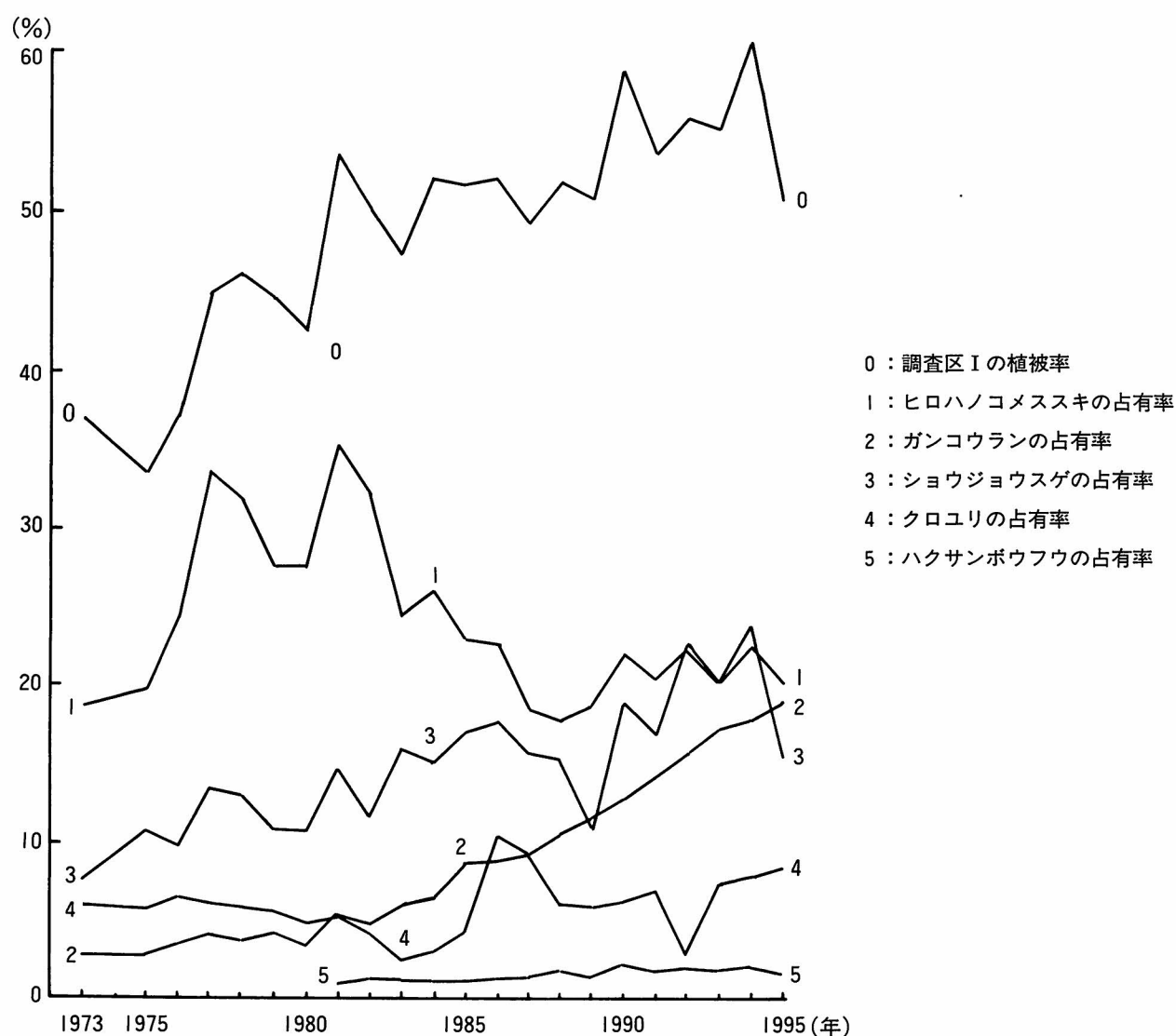


図3 調査区 I の植被率と数種の占有率の経年変化

植被率から回復をみる

図3は調査区Ⅰに出現する各種の占有率の年変化と、植生全体が調査地を占める割合、すなわち植被率をグラフに表したものです。したがって、 $100 - \text{植被率} = \text{裸地率}$ となります。この調査地では15種類の植物がみられ、そのうちグラフに表しているのは5種類のみですが、全体として右上がりの傾向をみせているので、調査区内の植物の繁りぐあいはいよいよ密になってきているのがわかります。種別にみると先駆種としてのヒロハノコメスキ(図3の1)は減少し、ガンコウラン(図3の2)やクロユリ(図3の4)が増加しています。これは自然状態に近い生育に変化してきているので、回復状態にあるといえます。しかし、植被率は1973年から1995年の22年間に13.06%上昇したに過ぎません。これを1年当たりの回復率としてみた場合、わずか0.59%です。

この調査区Ⅰの植被率は、最近5年間の平均値が55.13%ですから、残り45%回復するためには、1995年から単純に計算して76年以上かかることになります。1973年から考えますと98年以上かかってやっと地面が見えなくなるわけです。調査区Ⅱでも22年間で4.04%上昇したにすぎないので、ここでも回復するためにはあと150年以上かかることになります。

白山の高山植生の願い

白山は原生的な自然が多く残されているといわれていますが、それでも年々増加する登山客が自然に与える影響は大きくなっています。特に、山頂付近の室堂平、弥陀ヶ原、南竜ヶ馬場などでの自然植生の荒廃がすすんでいます。戦前までは宿泊施設の収容人員が200人程度であったものが、登山客の増加とともに宿泊施設の増設が行われました。現在の室堂での750人規模の宿泊施設が1969年に完成し、翌年の1970年には、宿泊者数は2万人を越え、1975年には3万人を超えたといえます。

人が自然を求め自然に接することはよいことですが、高山植物の生育環境にも限られたスペースしかないと考えなければなりません。登山者のために便利な施設を造るのは、人にとっては良いことでしょう。しかし、自然にとって良いかどうかは別の問題です。登山者の増加によって、高山植物が踏み荒らされ自然破壊がすすみますと、自然を求めてくる人にとってはかえって悲しいことになってしまいます。

白山では早い時期に登山路からゴミ箱を撤去し、ゴミの持ち帰り運動をすすめ、現在ではゴミの持ち帰りは当然のことのよう登山者に理解されています。ゴミ持ち帰り運動、し尿処理、高山植生地へのふみ込み禁止等、考えてみたらごく普通のことなのですが、こうしたわずかな心がけが自然を悠久に伝える思いにつながっていくわけです。ほんのちょっとした不注意が自然をズタズタに壊し、もとの自然が帰ってくるのは遠い未来になってしまうことを自覚しなければなりません。

〈*天理大学、**樺原市立畝傍南小学校〉

ニホンザルを山に帰そう

ー白山ジライ谷での人工給餌の中止ー

林 哲

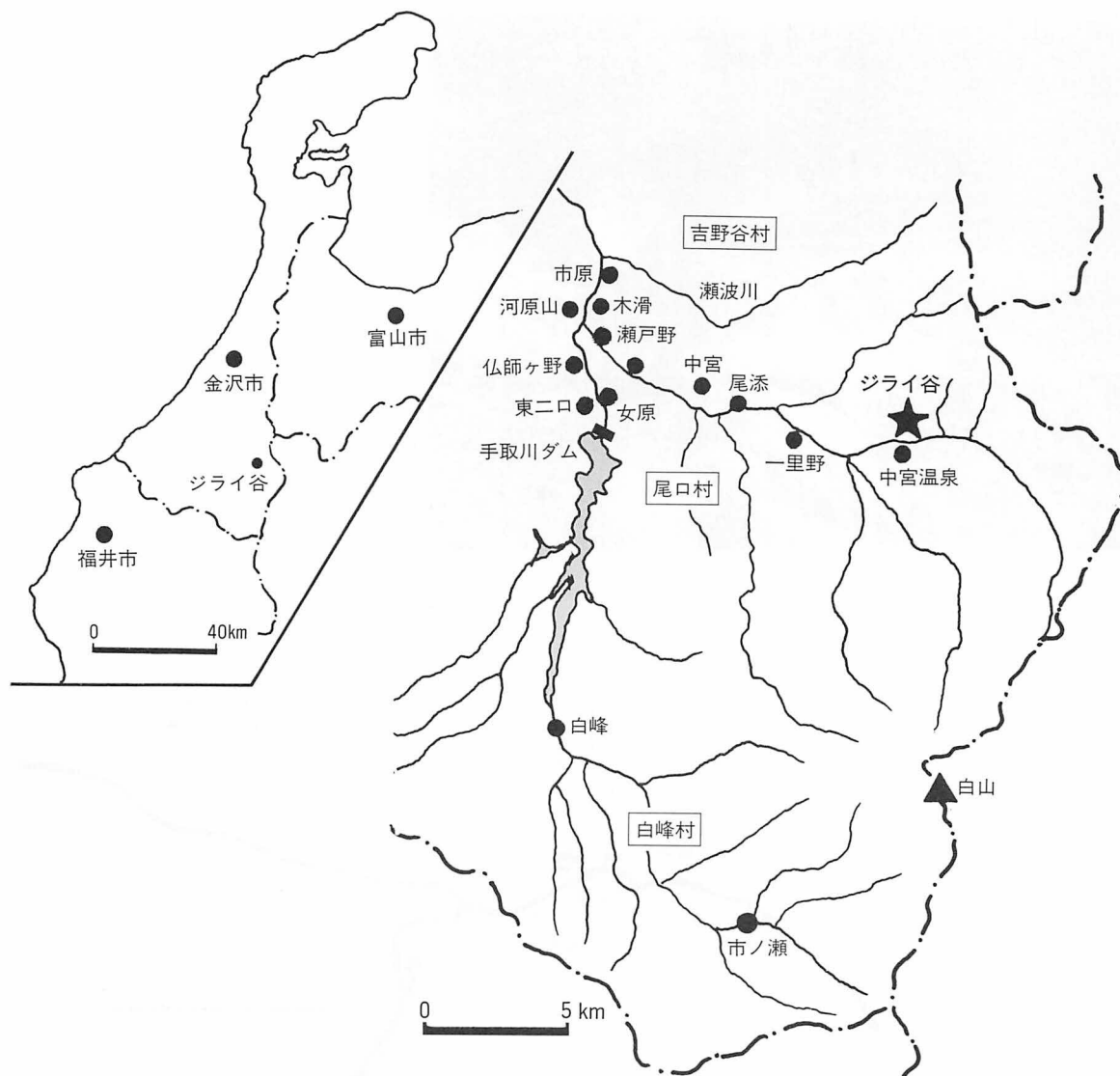


白山のニホンザル（当年生まれ）

野猿^{きゅうじ}広場の人工給餌の中止

平成7年5月12日、石川県（白山自然保護センター）、吉野谷村、中宮温泉旅館協同組合の3者は、ジライ谷のニホンザルの取扱いについて協議し、昭和41年以来続けてきた野猿広場の人工給餌の中止を決めました。あわせて中宮展示館、中宮温泉、白山スーパー林道周辺に出没するニホンザルの群れや個体の追い払いを含む「管理」活動を3者が協力して行うことにしました。

ジライ谷野猿広場では、間近で見れるニホンザルの人気が高かったのですが、平成7年からは給餌を行っていませんので、今後は、ジライ谷周辺に生息する自然状態のニホンザルを観察することとなります。みなさんのご理解、ご協力をお願いします。

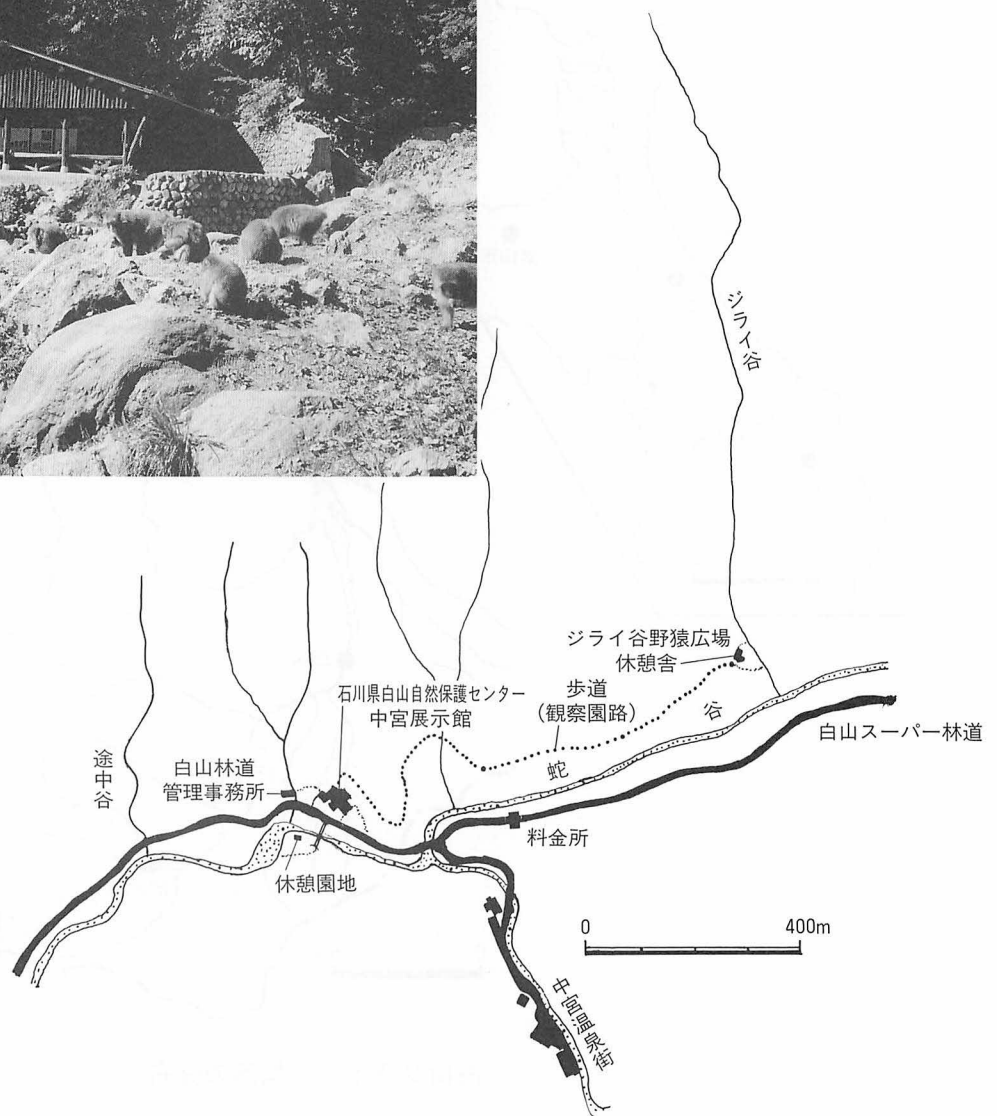


白山ジライ谷と集落の分布

人工給餌中止の経緯－ジライ谷野猿広場と白山麓のニホンザル

餌付けを開始して20年経過した昭和60年頃、ニホンザルが白山スーパー林道沿線や中宮温泉周辺に出没し、観光客に物乞いしたり、土産物店で販売物を奪ったりする事件が発生するようになってきました。同時に尾口村尾添や吉野谷村中宮の集落でもニホンザルによる作物被害が発生するようになりました。その後5年の間に、被害はますます拡大、広域化し、ついには尾口村尾添、瀬戸、瀬戸野、東二口、女原、吉野谷村中宮、木滑、市原、鳥越村仏師ヶ野、河原山などの山麓の集落で作物被害が出るようになったのです。

そして、ついに平成3年、吉野谷村と尾口村はニホンザル数頭を駆除する事態になってしまいました。この時、県内外の反響は大きく、この年を境としてジライ谷の「餌付け」問題を検討する必要にせまられたのでした。被害防除のためとはいいながら「駆除＝捕殺」する地元集落の要望と村と県が行っているジライ谷の「給餌事業」は矛盾していたからです。この年から県（白山自然保護センター）、村及び中宮温泉旅館協同組合で協議を始め、数年間の話し合いの末、平成7年度から人工給餌を中止し、ニホンザルを「山に帰す」ことにしたのです。



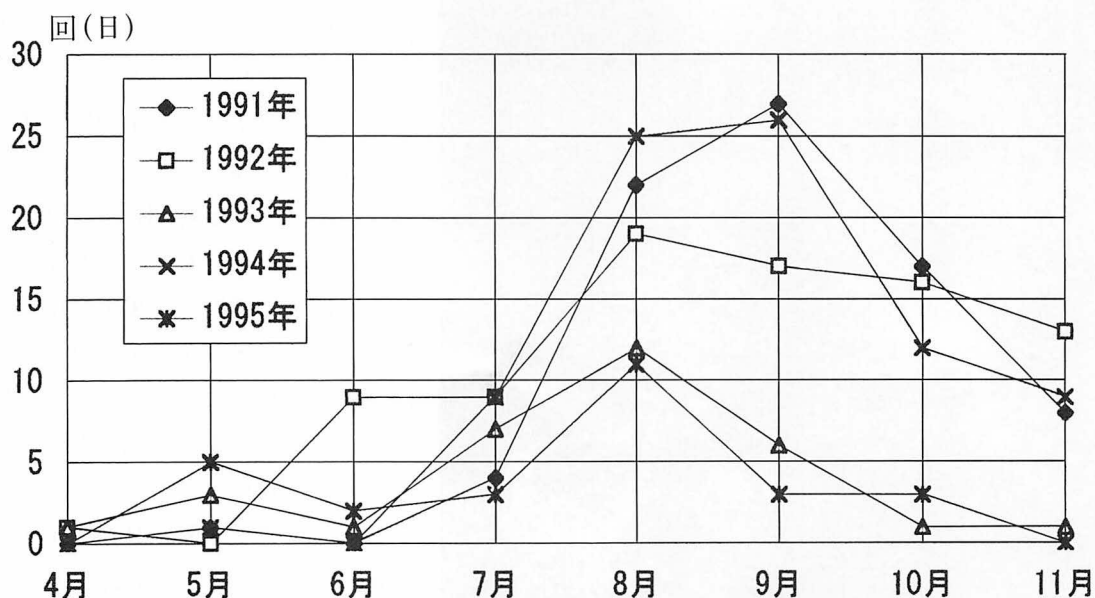
ジライヤ谷野猿広場周辺園とカムリ群の群れ

野猿広場の歴史、これまでの運営

昭和30年頃、金沢市のナチュラリスト糸田敬仁さんは自然観察のため蛇谷源流部にたびたび通っていましたが、当地域に生息する野生のニホンザルに魅せられ、昭和37年白山国立公園の指定を契機に、ニホンザルを餌付けして一般に公開したいと考えたのです。糸田さんはその後、一人で行う限界を感じ、昭和39年吉野谷村の助力を得ることとなり、3年間の苦労の末、昭和41年には現在のジライヤ谷野猿広場の餌場にまで群れを導くことに成功したのです。その後、昭和47年までの7年間はジライヤ谷野猿公園（苑）と呼ばれ、吉野谷村が管理・運営してきました。

昭和48年に、石川県は環境庁の協力を得て、ジライヤ谷の近くで白山自然保護センターを建設します。同時に周辺の野外観察施設（観察路と休憩舎、野猿広場―野猿公園を改称）を建設・整備してこれらを一体的に「蛇谷自然観察園」と呼び、野猿広場については昭和48年から県と吉野谷村で共同で運営してきました。この間、間近に野生のニホンザルが見られるということで、たくさんの方々の野外教育や野生生物の保護普及に影響を与えてきました。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	合計
1991年	-	1	0	4	22	27	17	8	79
1992年	1	0	9	9	19	17	16	13	83
1993年	1	3	1	7	12	6	1	1	31
1994年	0	1	0	9	25	26	12	9	82
1995年	0	5	2	3	11	3	3	0	27



ジライ谷野猿広場のサルの利用日数
(給餌を中止した1995年には利用数が減少)

人工給餌とニホンザルを山に帰そう

ニホンザルの現況研究会(京都大学霊長類研究所)の報告では、昭和40年代に既に農作物被害(「野荒らし」)が発生し、人工給餌がその引き金になったことを指摘しています。

現在、ニホンザルの被害地ではサルが悪者にされていますが、そもそも餌付けで人に馴らしたのは私たち人間ですから、責任の一端は私たちにあります。餌付けされたサルたちは、餌場(野猿広場)近辺に、食べられるものがあればなんでも食べるのは当然です。このような状況でサルを加害者にし、悪者よばわりするのは一方的です。

私たちが30年間も餌を与えてきたジライ谷のサルたちに、突然「山へ帰りなさい」と言うのは私たちの都合で、勝手です。サルたちはおそらくとまどっていることでしょう。サルたちはジライ谷や白山スーパー林道沿いに出没して、今までのように人の餌をあてにすることでしょう。

今後、私たちとニホンザルが共存するため、サルたちが山で十分に餌が食べられるようにブナ林などの保全について私たちが気を配っていかねばなりません。

ジライ谷やスーパー林道周辺では、サルに餌を与えることのないよう重ねてみなさんのご協力をお願いします。

〈白山自然保護センター〉

イワヒバリの夏の暮らし 2

上馬 康生

繁殖時期は梅雨の最中



6月中旬になると梅雨が始まります。高山は低地と違ってガスがかかったり、強風が吹いたりしてもともと天候がよくないところですから、雨の降る中での調査はなかなかはかどりません。その中でイワヒバリの繁殖時期の推定に役立つ観察記録には以下のものがありました。巣材の状況から判断して巣造り中と考えられる巣への出入りが1例、巣立ち約3日前と考えられる巣内の3羽の雛^{ひな}に餌^{えき}を運んでくる親鳥が1例、鳴きながら親鳥に近づき餌をねだっている巣立ち後約5～7日たった雛が4例、日数は不明ながら親鳥と一緒にいる巣立ち雛が9例です。

いっしょに調査をしていただいた中村雅彦さんの乗鞍岳での研究で、イワヒバ

りが卵を抱く期間が約12日、巣内で雛を育てる期間は約14日、巣外で雛を育てる期間は約13日であることが分かっています。これらのことと繁殖行動が観察された日から、白山でのイワヒバリの繁殖時期を推定すると、6月上旬から中旬に巣造りをして、産卵は6月20日過ぎから7月初め、雛が生まれるのは7月上旬から中旬、巣立ちは7月下旬ということになります。ちょうど梅雨の最中に、巣の中で卵を抱いたり雛を育て、梅雨があけるころに巣立っていくのです。このあと8月上旬まで、巣立った雛に餌を与えているイワヒバリを見ることができます。なお、1回目の繁殖が終わってから2回目の繁殖に入るイワヒバリがいることが、乗鞍岳の調査で明らかになっており、白山でも9月の調査で2回目の繁殖の若鳥が見つかることから、その可能性が十分あります。

巣は今回の調査で新たに6か所見つかり、今までに明らかになっているものと合わせると合計13か所となりました。すべて御前峰、大汝峰、剣ヶ峰の白山山頂周辺で見つかっています。大きな岩の裂け目や岩と地面の間のくぼみなどに、植物の茎や根などで造られたお椀^{わん}状の巣でした。

亜高山帯にも分布

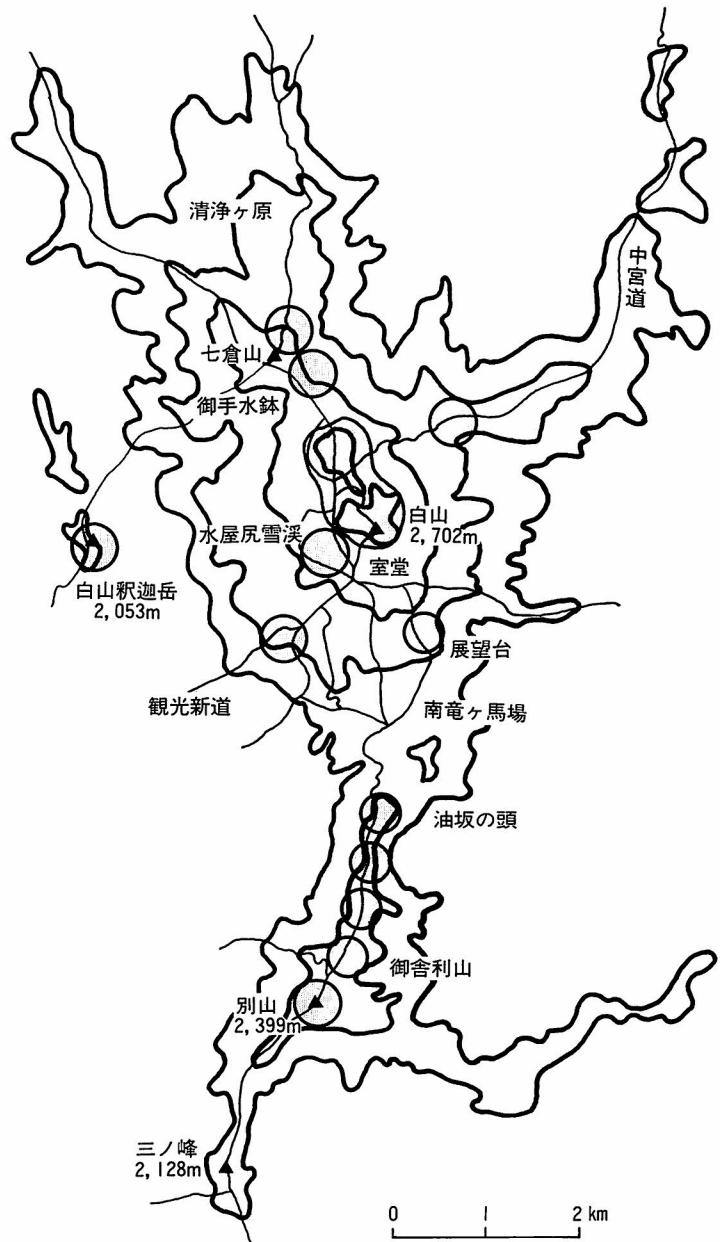
イワヒバリの行動の観察は山頂部を中心に行いましたが、これとは別に白山全体の繁殖期の分布状況を知るために、6月中旬から7月下旬に広範囲を歩きました。少なくとも標高2,000m以上の登山道沿いは全て、イワヒバリがいないかどうか調べました。その結果、油坂の頭から別山山頂にかけての範囲、黒ボコ岩付近、中宮道の上部、御手水鉢から七倉山の北方にかけての範囲で繁殖期に記録できました。また少し前になりますが1987年に、この他に展望歩道の展望台付近、白山釈迦

岳山頂でも記録しています。

中宮道上部と御手水鉢付近では、どちらも7月下旬に、少なくとも4羽の親鳥と一緒にいる巣立ち雛が見つかったので、その付近に巣があり、群れによる協同繁殖をしていると考えられます。また御舎利山北方や別山山頂では、6月下旬から7月上旬に6～7羽の群れが見ついていることから、同じく協同繁殖の可能性が高いと考えられます。一方、観光新道上部では、毎回1羽か2羽しか見つかりません。巣立ち雛に餌を与えているところが観察できているので、付近で繁殖したことはまちがいありません。同じように水屋尻雪溪上部（室堂から千蛇ヶ池へ至る近道）でも、巣立ち雛を別にとすると繁殖期に1～2羽の親鳥しか見たことがありません。今後の確認調査が必要ですが、イワヒバリは協同繁殖だけでなく、一般の多くの鳥のようにつがいの2羽だけで繁殖することもあるのかも知れません。

繁殖期にイワヒバリが記録された場所を、群れや、つがいの違いを推定した上で表すと図のようになります。前号でお話ししたように、足輪で個体識別したイワヒバリの行動追跡などにより、山頂部には6群、少なくとも38羽の成鳥が見つかりました。また山頂部以外では少なくとも12か所に分かれ、各地点で確認された成鳥の最大数は、今回調査した3年間の記録に限った場合28羽、これらとは重複しないと考えられる1987年の記録を合わせた場合38羽となります。山頂部、山頂部以外を合わせるとそれぞれ66羽、76羽となり、少なくともこれ以上のイワヒバリがいることが分かりました。なお、今回は以前に記録のあった三ノ峰や清浄ヶ原北部にはみつかりませんでした（はくさん第13巻4号参照）。

さて、繁殖期にイワヒバリが記録された場所の環境を調べると、大きく2つに分けることができます。一つは御前峰、大汝峰、剣ヶ峰に囲まれた山頂部の、岩礫地や雪溪、風衝地、雪田植生などがあるところですが、そこは背のごく低い植物がところどころに生えているだけで、ほとんどが岩や礫、砂からできているところで、平坦地も比較的多くあります。標高は概ね2,500m以上で、いわゆる高山帯に属します。もう一つは油坂の頭から別山にかけての尾根筋の東側のように、岩や土砂の崖地の多い急斜面で、平坦地はほとんどなく、遅くまで残る雪溪があるところですが、周辺には高



繁殖期（6月中旬～7月下旬）のイワヒバリの分布

太線は標高2,000m以上200mごとの等高線、細線は登山道

茎草原や低木林が広がり、一部に高木林もあります。標高は2,100~2,400m くらいのところで、植生帯でいうと大部分が亜高山帯に属します。

いままで、イワヒバリの繁殖期の生息環境としては、前者のような環境が一般的とされてきました。しかし白山では、後者のような環境にも広く分布していることが分かりました。雪の多いことが、地形や植生に影響し、また夏まで雪渓を残すなど、イワヒバリが営巣する環境や餌をとる環境を作り出す大きな要因となっているのではないかと考えられます。ただし、山頂部には群れが重なり合って分布しているのに対し、他の場所では点在して分布しているところをみると、イワヒバリにとっては山頂部のような高山帯の環境が本来の繁殖地の環境と思われます。

イワヒバリの保護について

イワヒバリの巣のいくつかは、山頂付近のお池めぐりコースと呼ばれる、多くの登山者が利用する歩道沿いにありました。なぜそのようなところにつくってしまったのかを考えると、イワヒバリが巣をつくる6月ころは登山者は少なく、近くに人が来ることはほとんどないので、何も気にせずには巣をつくったのでしょう。そして幸いなことに、巣の中で卵を抱いたり雛を育てる時期も、梅雨の最中で登山者は多くありません。雨や霧のため視界が悪く、人に見つかることもほとんどないと思われます。このように、登山者による影響は比較的少ないと考えられますが、巣立った雛を育てる時期や2回目の繁殖があるとする、登山者が非常に多くなる7月下旬から8月にあたることから、何らかの影響があると思われます。

人をあまり恐れないイワヒバリといえども、すぐ横を人が通れば、巣の中にいる親鳥はきっと迷惑に違いありません。また、登山道はイワヒバリの天敵にあたるオコジョやキツネなどがよく利用します。よく使われる巣が歩道の間近にあるような場合は、歩道の位置を変えることもイワヒバリの保護のためには有効でしょう。そして何よりも、私たち登山者は、きめられた歩道を外れてイワヒバリの巣があるかも知れないところへ近づくことのないようにしなければなりません。

そして前号でもお話ししたように、白山のイワヒバリにとっては、上昇気流によって吹き上げられてきた昆虫類が、かなり重要な餌となっています。また標高1,000m 前後に越冬場所があることがわかっています。これらのことから、繁殖地がある高山帯や亜高山帯の生息環境だけでなく、低山を含めた山域全体の自然を保つことが必要です。

おわりに

白山との比較のため乗鞍岳のイワヒバリの生息環境を訪ねてみました。乗鞍岳は自動車で、白山の山頂の標高と同じ2,700m まで一気に上がれます。そこには宿泊施設や食堂、売店などが建ち並び、たくさんの観光客が来ていました。駐車場の周りで餌をさがし、建物の隙間に巣を造っているイワヒバリの姿を見ていると、人が与えた餌にすぐに餌付いたことが納得できました。餌付きが悪かった白山のイワヒバリは、それだけ自然な姿を保ち続けてきたからなのだと分かりました。

乗鞍岳から望むと、白山は雲海のはるか彼方に浮かんでいました。白山は日本列島の西限の高山であり、高山帯の面積はごくわずかしかありません。イワヒバリに限らず高山にすむ動植物にとっては、仲間のすむ山から遠く離れ、しかもすむ場所も狭くて厳しい環境です。そこへ行く私たち登山者は、彼らの生活に大なり小なり悪影響を与えていることを肝に命じ、慎重に行動しなければならないと思います。

〈白山自然保護センター〉

施設だより

ブナオ山 観察舎から

殊才 実

ブナオ山観察舎は、5月6日に閉館しました。

今年は例年になく雪が多い年でした。昨年4月25日、観察舎での積雪はゼロでしたが今年は110cmもあり、5月6日になってようやく雪がなくなりました。

しかし、その影響で、かえってサルなどの動物達をよく観察することが出来ました。4月1日～5月5日までの対岸のブナオ山南斜面で観察したサルの群れは、昨年は16日間だったのに対し、今年は29日間も観察することができました。山中に雪が多い中、雪解けの早い南向き斜面は新芽が生え、それを求めて動物達が集まって来たからだと推測されます。

珍しく、カモシカとサルが仲良く一緒に採食する光景をよく観察することができました。また、イヌワシやクマタカが勇ましく飛ぶ姿も見られました。

今年は、新しい試みとして、1月～4月の第4日曜日に、自然観察会を行いました。大好評だったので、来シーズンはもう少し早めの11月頃に行ない、テーマやコースを設定した自然観察会にしたいと思っています。

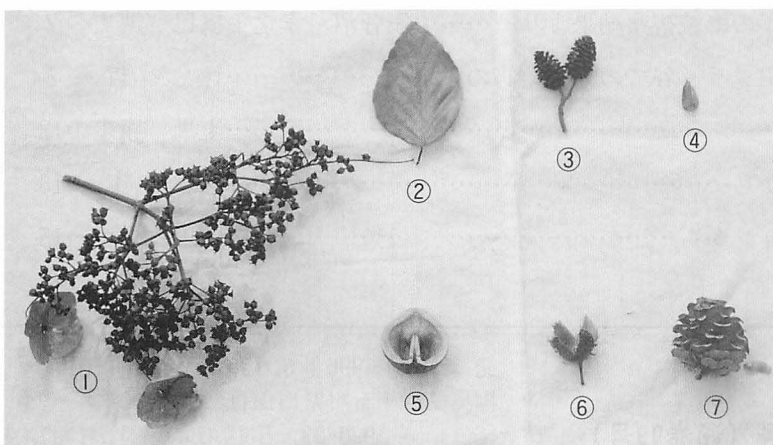


市ノ瀬ステーションから

木田真由美

積雪が多かった今年は、市ノ瀬ステーションまでの道（白山公園線）の開通が遅れ、開館は5月18日になってしまいました。利用者みなさんにはたいへんご迷惑をおかけしました。

5月26日に釈迦新道登山口周辺でミニ観察会を行いました。今回の観察会は、初心者でも気軽に楽しんでもらえるような観察会にしようと「春のブナ林探検隊」と題して開催しました。ブナの実や葉、ノウサギのフン、キツツキの突っついた木片など18種類もの「森の宝物」を探したり、普段はあまり意識していない聴覚を目を閉じることによって刺激したり、森の中の様々なものを実際に触って自然の感触を楽しんだりしながら歩きました。参加者からは「気持ちよかった」「このままの自然を残したい」といった声が聞かれ、自然について感じてもらうことができたのではないかと思います。これからも白山の自然に触れて元気になってもらえるような観察会を開いていきたいと思っています。



「森の宝物」 何かな？

- ① 昨年のワルナシサト
- ② ワナノ草
- ③ ヤナギの実
- ④ ワナノ草
- ⑤ オニミミの実
- ⑥ (1) ノミノミ
- ⑦ カシノ葉
- ⑧ カシノ葉
- ⑨ カシノ葉
- ⑩ カシノ葉
- ⑪ カシノ葉
- ⑫ カシノ葉
- ⑬ カシノ葉
- ⑭ カシノ葉
- ⑮ カシノ葉
- ⑯ カシノ葉
- ⑰ カシノ葉
- ⑱ カシノ葉

センターの動き（3月22日～6月20日）

- | | |
|---|----------------------------------|
| 3.24 ミニ自然観察会（ブナオ山観察舎） | 5.26 ミニ自然観察会（市ノ瀬ステーション） |
| 4.19 白山宿泊施設予約制発表 | 5.26 吉野谷村グリーンデー（中宮展示館周辺） |
| 4.24 環境庁中部地区国立公園野生生物管理
事務所長来所（本庁舎ほか） | 6.6 白山登山環境適正化連絡会（本庁舎） |
| 4.28 ミニ自然観察会（ブナオ山観察舎） | 6.8 ブナ林自然観察会（市ノ瀬ステーション） |
| 5.6 ブナオ山観察舎閉館（11月19日まで） | 6.12 白山自然保護調査研究会幹事会（金沢） |
| 5.18 市ノ瀬ステーション開館 | 6.14 石川県白山自動車利用適正化連絡協議会
（白峰村） |
| 5.23、24 環境庁係官視察（中宮展示館ほか） | 6.15 中宮展示館部分開館 |

編集後記

雪崩の被害により、開館が遅れていました中宮展示館は、6月15日に開館しました。残念ながら被害にあったブナ林展示室は、まだ復旧していませんが、それ以外の場所を整備して仮オープンさせていただきました。以前に比べれば不十分な展示内容ですが、ハイビジョンや高山植物・鳥類・化石などの標本展示、周辺の自然観察路での探索を楽しんでいただければと思います。

さて、白山自然保護センターでは、白山麓のキノコを紹介した白山の自然誌16「白山のキノコ」を発刊しました。白山で比較的簡単に見つかるキノコから珍しいキノコまで数種類のキノコを紹介した小冊子です。キノコの生活、自然界での役割、キノコの不思議、白山麓で使われているキノコの方言なども紹介しています。ご希望の方は、送料代として190円切手を同封の上、当センターまでお申し込み下さい。

1973年7月に普及誌「はくさん」第1号が発刊されて以来、早いもので今年で24年目を迎えます。次号はいよいよ通巻100号となります。これまで白山地域の自然・人文について、いろいろと紹介してきましたが、ともすれば独善的な内容の所もあったのではないかと思います。これからもこの「はくさん」の内容をより充実させるためにも、自然保護センターまでご意見・ご感想をお寄せいただければ幸いです。

（小川）

目次

表紙 白峰村河内谷大空 旧愛宕八郎家……………小川 弘司…	1
白山室堂平の高山植物—23カ年の継続観察結果より—……………菅沼 孝之・辰巳 博史…	2
ニホンザルを山に帰そう—白山ジライ谷での人工給餌の中止—……………林 哲 …	8
イワヒバリの夏のくらし 2……………上馬 康生…	12
施設だより ブナオ山観察舎から……………殊才 実 …	15
市ノ瀬ステーションから……………木田真由美…	15